

月見の里短歌ワークショップ

尾内甲太郎 2025年9月27日

① 水解

② 虫食い短歌

- このビルの向こうに□があることをかもめの声に教えてもらう／千種創一
- 血球が血管を掠る音などをしづかといへり□月まひるま／小原奈実
- 雪、それは発されぬまま息絶えた言葉の灰が宿した□／馬場めぐみ
- 履歴書にけして書かないことだけが僕を□へ連れてゆくのだ／田中翠香
- 墓地に咲く□の数記してのち山鳩色のノートを閉づる／永井陽子
- 秋晴れの今日は祭り日□をひと箱買ってデパートを出る／石川信雄
- をふかせる君に肺といふ逆さの桜いま咲きほこる／藪内亮輔

③ あいだの主体

◆堀田季何の説

作者総体
作者名義

○ 作者実体（生活者）
○ 認識主体（作者）

作中主体 ○ 視点主体（話者）
○ 作中行為者（主人公）

※解釈者の存在がない。

◆あいだの主体説

（※ 多重主体主義／小倉紀蔵『日本群島文明史』）

読み手→ あいだの主体 | ←認識主体
他の人→ |
他の人→ |

〈枯芝やバンクシーなら声を描く／なつはづき〉
〈"ぼくら"というひとつになれぬますぎた日々の
地球の街に雪降る／馬場めぐみ〉

④ 新聞歌壇から

替える朝

名古屋市 外山 雪

対照的に、近年の岡井隆の箴言的な作品群は認識主体を一個人から不特定多数に拡げてある点で近代的でない。もし認識主体が拡大すれば、これこそが現代短歌へのパラダイム転換かもしれない。（糸育空爆之図の壮快よ、われらかく長くながく待ちゆき）（大辻隆弘）の「われら」や「僕らには未だ見えざる五つ目の季節が窓の向こうに揺れる」（山田航）の「僕ら」は、視点主体の人物が複数形ながらの傾向として私性が薄れている事が指摘されているが、これは拡大された認識主体を多用しているからである（複数形の人物は必要条件でない）。世代的な感覚や他者と交換可能な自分の感覚が詠まれる反面、作者実体限定の思想や情感が詠まれなくなってきた。

堀田季何 「短歌が引き受ける私とは」 角川短歌 2017年4月号

加藤 治郎 選

あきらめるって気持ちよかつた人類の帽子が似合わないわたしたち さいたま市 霧島あきら
△評△ずっと、あきらめるなど言われてきたように思う。その束縛から自由になってしまった
らしいのだと、人類の帽子は大胆である。
音楽にからだはゆれてそのあとですこし遅れて髪を切っている 大阪市 羽水 蘿
△評△後ろから見ているのだろう。巧みな描写だ。音楽の書きが全身に表れている。
大人になるとはどういうことだストローが触れる水のくぼみ 吸わない 横須賀市 森久保りりか
た次の日 雲南省 熱田 一俊
雨のあと土の匂いに驚いておどろいて君に電話を掛けたい 武蔵野市 北谷 雪
かたまりの雲がゆっくり流れしていく生まれるまえのあなたを置いて 平塚市 芝澤 樹
「もしもし」と応えています「もしもし」はどういう意味があるのでしょうか 守谷市 久保田洋二
カルピスのグラスに付いた水滴がコースターを濡らす遠き初恋 東京 福島 隆史
事件ですか事故ですかそれとも流れ星を追いかけゆくのですか 浜松市 尾内甲太郎
現実の水際に立ちて体内の部品をひとつ取り

毎日歌壇 2024年10月14日毎日新聞

⑤ 「誰にも伝わらないと思ったあなたのことば」を使った歌会